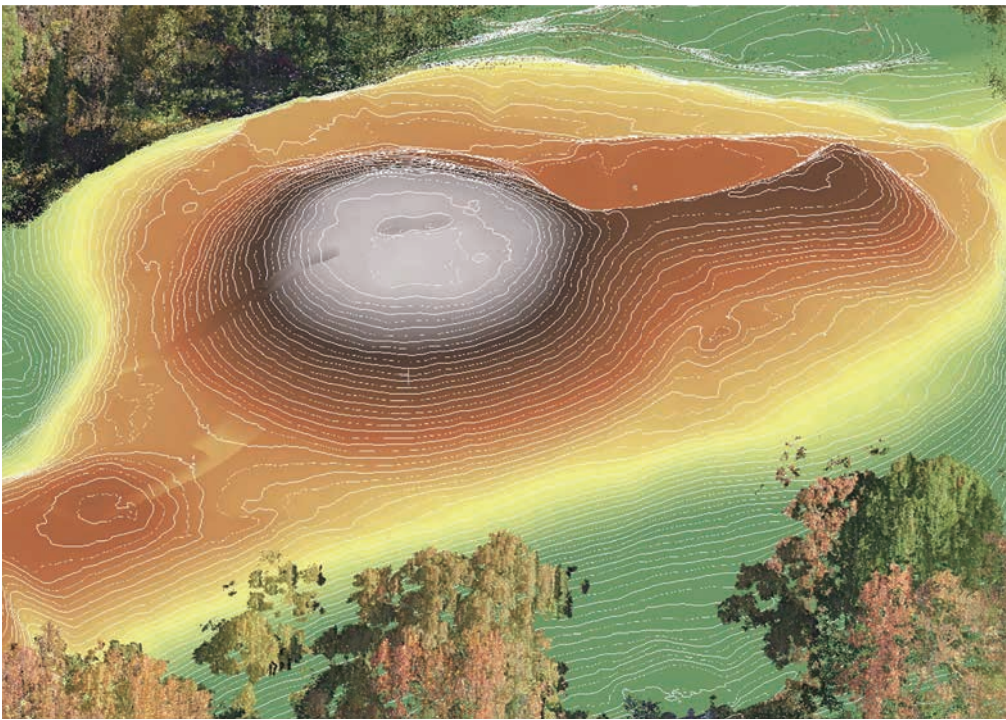


荒木山

真庭市史跡 荒木山西塚古墳第 1 次発掘調査概報



2023

真庭市教育委員会

荒木山

真庭市史跡 荒木山西塚古墳第1次発掘調査概報

2023

真庭市教育委員会

例 言

- 1 本書は、真庭市教育委員会を主体として実施した、岡山県真庭市上水田 2146 番地外に所在する、真庭市史跡に指定されている、荒木山西塚古墳の第 1 次発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は、プロジェクト推進のため組織された「西の明日香村コンソーシアム」の構成員である真庭市教育委員会、真庭市北房振興局、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター、北房文化遺産保存会が共同し調査業務を進めた。
- 3 発掘調査は、真庭市教育委員会生涯学習課主幹 新谷俊典、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターセンター長 津村宏臣、同センター研究員 岸田 徹を調査担当とし、調査期間は令和 4 年 (2022 年)11 月 26 日から令和 6 年 (2023 年)3 月 12 日、調査面積は 52㎡である。
- 4 調査にあたっては、荒木山西塚古墳発掘調査サポーターに登録いただいた専門家の皆様方にご指導ご協力を賜った。特にサポーターから選出された荒木山西塚発掘調査ワーキンググループ委員の方々には発掘調査計画段階から実施にいたるまでご指導ご助言をいただいた。

サポーターにご登録いただいた専門家及びワーキンググループ委員は下記の皆様方である。

◆荒木山西塚古墳発掘調査サポーター（敬称略・五十音順）

今津 勝紀、岩本 崇、亀田 修一、白石 純、高橋 進一、田畑 幸嗣、寺前 直人、中村賢太郎、西田 和浩、平井 典子、松木 武彦、松田 陽、松本 直子、村上 恭通、行田 裕美

◆荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ

委員 亀田 修一 岡山理科大学生物地球学部名誉教授
白石 純 岡山理科大学生物地球学部教授、真庭市文化財保護審議会委員
寺前 直人 駒澤大学文学部教授
松木 武彦 国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授（ワーキンググループ座長）
行田 裕美 元津山市教育委員会生涯学習部部長
アドバイザー 尾上 元規 岡山県教育庁文化財課副課長
津村 宏臣 同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターセンター長、真庭市政策アドバイザー

- 5 本書の執筆は、西の明日香村コンソーシアムの構成員及び荒木山西塚古墳発掘調査サポーターの方、調査に参加した駒澤大学大学院人文科学研究科に所属する大学院生が下記のとおり分担して執筆した。

第 1 章 新谷 俊典
第 2 章 畦田 正博（北房文化遺産保存会会長）・平井 典子（北房文化遺産保存会顧問）
第 3 章第 1 節 寺前 直人・鈴木 崇司（駒澤大学大学院人文科学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 DC2）
第 2 節 寺前 直人・津村 宏臣・西村 航希（駒澤大学大学院人文科学研究科修士課程）
第 3 節 岸田 徹
第 4 節 新谷 俊典・行田 裕美・白石 純
第 4 章 新谷 俊典

- 6 本書の編集は新谷が行った。
- 7 遺構の写真撮影、遺物の実測及び写真撮影は新谷がおこなった。
- 8 本書に用いた高度値は標高であり、北方位は、平面直角座標第 V 系（世界測地系）の座標北である。また、抄録に記載したグリッド値・経緯度は世界測地系による。
- 9 土層注記に記載した色調は、『新版標準土色帖 (1988 年度版)』に準拠している。
- 10 本書の第 2 図に掲載した地図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図の「告部」を複製・加筆したものである。
- 11 表紙の題字は、久松秀雄氏（北房文化遺産保存会顧問）による。
- 12 本調査に関わるすべての遺物・記録資料類は、真庭市教育委員会（岡山県真庭市久世 2927 番地 2）が保管している。
- 13 本調査及び遺物整理中には、地権者や地元自治会の方々をはじめ、多くの皆様から有益なご助言ご協力を受けました。本概報ではご芳名を列記しませんが、深く感謝申し上げる次第です。

目次

例言

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
1. トレンチ1	5
2. トレンチ2	8
3. 地中レーダ探査	11
4. 出土遺物	15
第4章 調査のまとめと課題	17

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 荒木山西塚古墳墳丘測量図及びトレンチ配置図 (1/400)	2
第2図 遺跡の位置及び調査地周辺の地形と遺跡分布 (1/25,000)	4
第3図 トレンチ1墳丘平面図・西壁断面図 (1/80)	6
第4図 トレンチ2墳丘平面図・西壁断面図 (1/80)	9
第5図 地中レーダ探査測線位置	11
第6図 西塚古墳墳頂における time-slice 図	12
第7図 後円部東側裾における time-slice 図	13
第8図 性格不明の高まりにおける time-slice 図	13
第9図 荒木山西塚古墳における代表的な探査結果	14
第10図 出土遺物 (1/4、19のみ 1/2)	16

図版目次

図版1 トレンチ1 (1)
図版2 トレンチ1 (2)
図版3 トレンチ1 (3)
図版4 トレンチ2 (1)
図版5 トレンチ2 (2)
図版6 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

荒木山西塚古墳は、真庭市上水田地内にあり、盆地内を流れる備中川が形成した沖積低地に面す、標高約190mの低丘陵尾根部に位置する。市内有数の前方後円墳であり、指呼の距離にある前方後方墳「荒木山東塚古墳」とともに市の史跡に指定されている。いずれも未発掘の古墳であるが、墳丘形態から東塚、次いで西塚の順で古墳時代前期に築造されたとみなされている。

真庭市では、令和3年3月に策定した「北房地域振興計画」の中で、北房地域の代表的地域資源である古墳をはじめとした文化遺産を文化振興や観光振興などあらゆる面で活用する「西の明日香村づくり」を提唱し、その中核プロジェクトとして、この荒木山西塚古墳の発掘調査を位置づけた。

荒木山西塚古墳では、発掘調査に先駆けて、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター（以下「同志社大学」と称す。）の協力のもと市・市教育委員会が主催した公民館講座の中で、測量及び地中レーダ探査等の非破壊調査が、平成30年度及び令和元年度に住民も参加する方式で実施されている（調査成果は真庭市埋蔵文化財調査報告9「荒木山」として令和3年3月に刊行）。この調査により、古墳の詳細な形状や地下構造、後円部墳頂部における埋蔵施設の存在等について一定の手がかりが得られていた。そこで、令和4・5年度の2か年度をかけて、古墳の性格及び内容等を把握するため、墳丘の規模や構造、遺物の有無を明らかにすることを目的に確認調査を行うこととした。そして、調査主体は、市教育委員会が担い、プロジェクトに関係する同志社大学や古墳の保存顕彰を担ってきた市民団体「北房文化遺産保存会」など関係団体と連携しながら実施することで関係者間での合意を得た。

その後、プロジェクト推進に向けた実施体制について検討を重ね、令和4年6月に真庭市と同志社大学との間で研究連携及び協力に関する協定を締結し、7月には真庭市北房振興局・真庭市教育委員会・同志社大学・北房文化遺産保存会等により構成される「西の明日香村コンソーシアム」を結成した。こうして民・学・官が連携した実施体制を構築するとともに、発掘調査が地域づくり・地域活性化へと繋がる取組みとなるよう、岡山県内を対象とした市外からの市民参加者の募集や、プロジェクトを応援する「荒木山西塚古墳発掘調査サポーター」募集の呼びかけを進めていった。

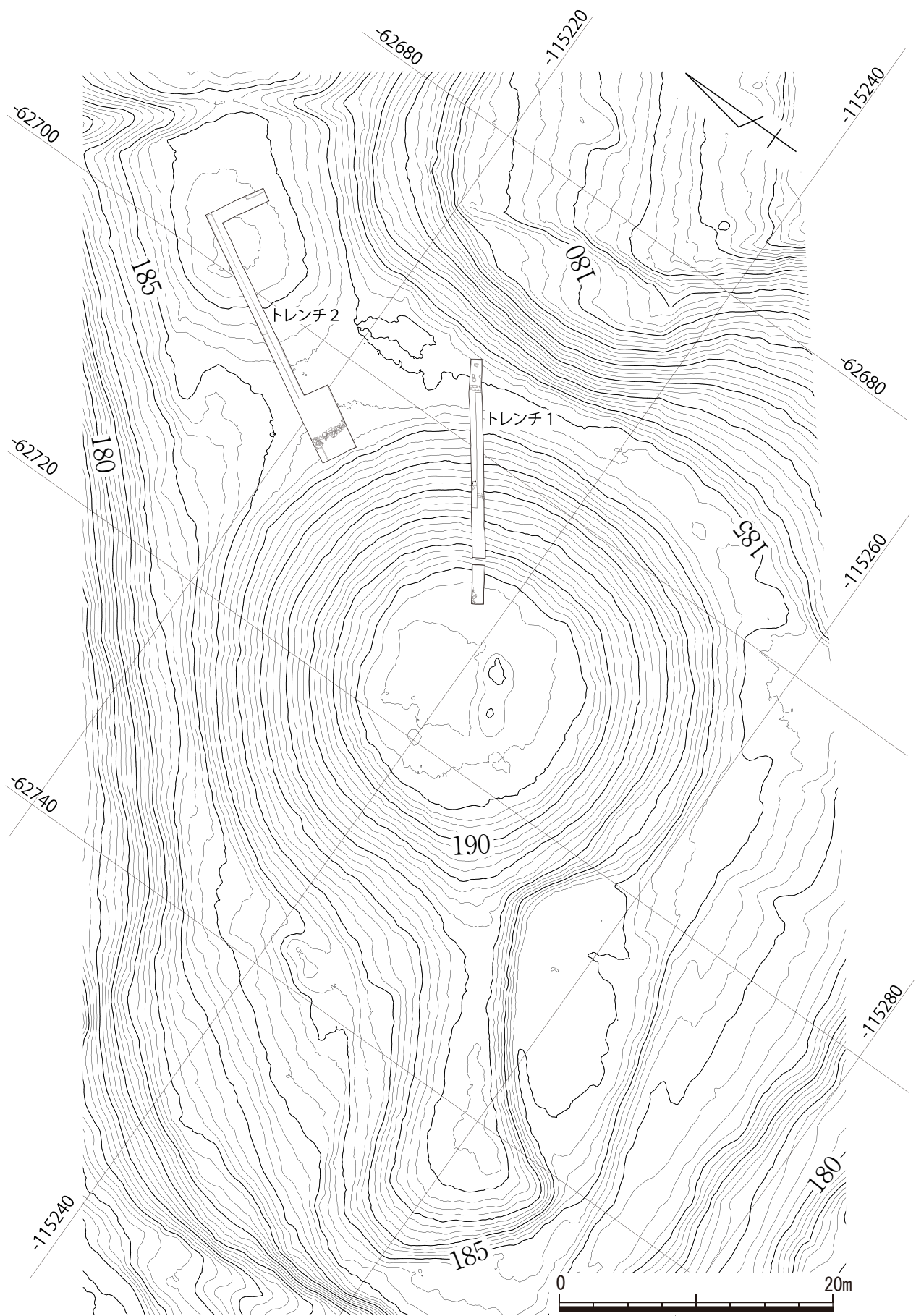
調査にあたっては、荒木山西塚古墳発掘調査サポーターに登録いただいた専門家の中から選ばれた、5名による「荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ（座長：松木武彦国立歴史民俗博物館教授）」を設置し、その指導助言を受けながら、調査計画の詳細を定め、それに基づき調査を実施した。また、調査には、コンソーシアム構成員の外、募集に応じた市民参加者や荒木山西塚古墳発掘調査サポーター、ワーキンググループの委員である寺前直人駒澤大学文学部教授を通じて同大学で考古学を専攻する大学院生なども随時加わりながら行った。記して感謝申し上げる次第である。

発掘調査は、11月26日にトレンチ1、トレンチ2を同時に着手した。一般市民が調査に参加しやすいよう土日も調査日とし、12月18日まで調査を行った。その後中断期間も挟み、令和5年2月17日から調査を再開し、翌年3月12日までに実働29日実施した。再開後の調査では、トレンチの規模を拡張し、西塚古墳の規模や構造及び西塚古墳北東側にある高まりの性格を追求した。

本調査の特色である市民参加型調査の点では、12月12日に北房中学校2年生生徒、同月18日に北房小学校PTAの親子、2月17日には北房小学校の6年生児童と地域の子どもたちも参加し、発掘作業を行った。また、令和5年3月4日には北房文化遺産保存会が運営の中心となり、現地説明会を開催し、市内外から約100名の参加者があった。期間中の参加者は延べ1,063名、そのうち663名が地域住民をはじめとする市民参加の方である。



現地説明会の様子



第1図 荒木山西塚古墳墳丘測量図及びトレンチ配置図 (1/400)

第2章 地理的・歴史的環境

岡山県真庭市北房地域は、吉備高原の一角に位置し、県北西部の真庭市南端にある総面積約 71.2 k²、人口約 4,600 人の町である。地域を流れる河川等によって台地が浸食され、小盆地を形成している。この盆地を囲むように、西にカルスト地形が発達した阿哲石灰岩台地（阿哲台）、北に同じく石灰岩地層が主となる上房北台と上房南台がある。このため、北房には備中鍾乳穴や諏訪洞をはじめとする大小 30 もの鍾乳洞が存在する。

旭川の支流である備中川は阿口から南下し、上中津井から北上する中津井川と上水田で合流すると、そこから東へ流れを変え、落合で旭川に注ぐ。このように河川が旭川水系である北房は、7世紀後半の天武朝時代に行われた吉備の分国により備中国に組み込まれたが、美作方面との結びつきが強かった地域である。南は高梁市、北は真庭市の勝山地域、東は真庭市の落合地域、西は新見市と接しており、古くから交通の要衝として経済・文化が栄えてきた。このため、北房は中山間地の小盆地でありながら、独自の発展を遂げていくことになる。

北房で最古の遺物は、中国自動車道建設に伴う発掘調査で備中平遺跡（五名）から出土した押型文土器である。押型文土器は縄文時代早期のもので、その後、谷尻遺跡（13）や空遺跡（下皆部）からも出土した。これに続く縄文前・中・後期は、桃山遺跡（14）から土器が出土する程度であったが、晩期になると、谷尻遺跡から土坑が発見され、そこから多くの土器や石器が出土した。この土器は、「谷尻式」と命名され、岡山県の縄文時代晩期の一時期を画する基準資料となっている。

弥生時代後期になると谷尻遺跡から、多数の土坑墓、住居跡群、畿内系や讃岐系の土器が出土した。さらに一辺 12 m、床面積 140²の大型住居跡も確認され、土器とともに巴形銅器なども発見されている。この時代のその他の遺跡としては、住居群が確認された桃山遺跡、丹塗りの土器が多数出土した祭祀遺跡である矢の内遺跡（18）などがある。

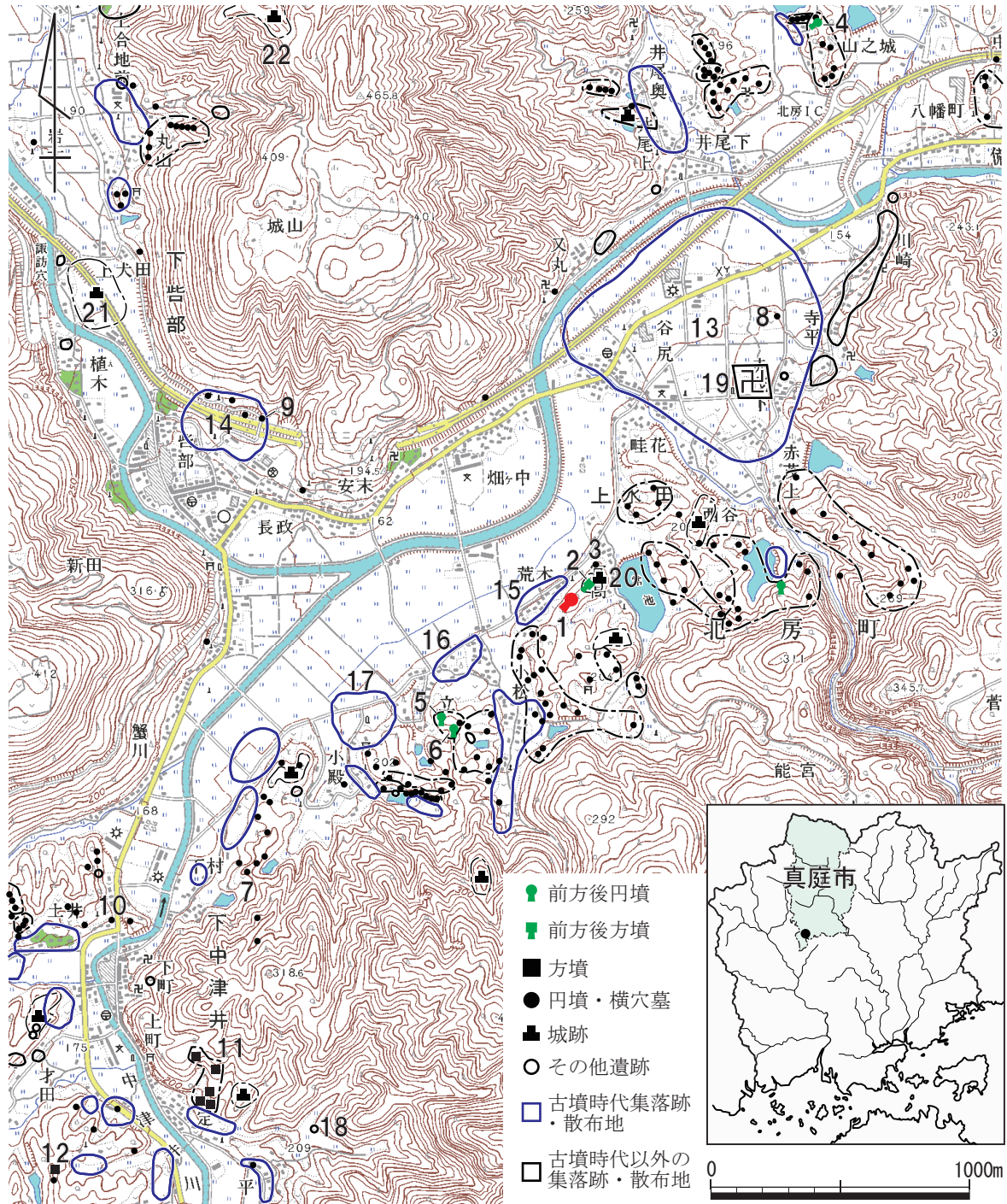
北房は、県下でも極めて古墳の多い地域で、地域内には 240 基以上が数えられる。古墳時代前期の荒木山東塚古墳（2）から始まり、他地域では古墳がほとんど築かれなくなった終末期（飛鳥時代）の大谷 1 号墳（12）まで首長墳が連綿と築かれている。特に盆地南側の山裾や丘陵上には東から西へと首長墳が続いている。

3世紀後半の築造とされる全長 43 m、前方後方墳の荒木山東塚古墳と、それに続く 4世紀の荒木山西塚古墳（1）は荒木山の同じ尾根上に立地している。荒木山西塚古墳は、全長 63 m、真庭市で 3 番目に大きな前方後円墳である。荒木山の北東、備中川北側の山之城の丘陵上には 5世紀のそぶつぶろ古墳（4）、南西には 5世紀の立 1 号墳（5）がある。そぶつぶろ古墳は、全長 49 m の前方後円墳、立 1 号墳は、全長 88 m を測る真庭市で最大の前方後円墳である。荒木山の北西、備中川西岸の丘陵上には、6世紀の小田鼻古墳（上皆部）がある。小田鼻古墳は全長 32 m の前方後方墳である。立 1 号墳からさらに南西に進むと 6世紀後半の下村 1 号墳（7）があり、下村 1 号墳の南には、7世紀の定古墳群（11）がある。古墳時代前期、上水田地域に築かれていた首長墳が後期には皆部、そして後期末から終末期には中津井地域へと移っていったことがうかがえる。下村 1 号墳は、真庭市で最大規模の横穴式石室をもつ円墳である。定古墳群の定東塚・西塚古墳、定北古墳は、いずれも横穴式石室の方墳であり、前述の大谷 1 号墳へと続く。下村 1 号墳と定古墳群の間、中津井の街の北側には国道拡張工事に伴って発掘され、横穴式石室から頭椎大刀等が出土した土井 2 号墳（10）も存在する。

大谷・定古墳群は、国の史跡となっている。7世紀後半の築造とされ、外護列石をもつ 5 段築成の方墳である大谷 1 号墳からは、岡山県指定重要文化財である金銅装環頭大刀や出土例の極めて少ない斧状を呈する金銅製の鏝の外、須恵質の陶棺等が出土した。定古墳群の定北古墳・定東塚・西塚古墳からは数多くの土師質の陶棺や土器・鉄製品（武器や馬具・農工具）の外、金製品（金糸・金製環）

等も出土している。

また、大谷1号墳・定古墳群との関係を考える上でも重要な、7世紀末（飛鳥時代末）に創建された古代寺院の英賀廃寺跡（19）や英賀郡の郡衙跡と推定される小殿遺跡（17）等も近辺にある。英賀廃寺跡では備中式軒丸瓦が、小殿遺跡からは平瓦や丸瓦・土器等の出土と掘立柱建物跡が確認されている。古代以来この地が英賀郡六郷の政治や信仰の中心であったと考えられている。



- 1 荒木山西塚古墳 2 荒木山東塚古墳 3 荒木3号墳 4 そぶつぶろ古墳 5 立1号墳 6 立2号墳
 7 下村1号墳 8 赤茂1号墳 9 桃山4号墳 10 土井2号墳 11 定古墳群 12 大谷1号墳
 13 谷尻遺跡 14 桃山遺跡 15 荒木遺跡 16 小松遺跡 17 小殿遺跡 18 矢の内遺跡 19 英賀廃寺
 20 荒木山東塚城跡 21 植木遺跡 22 丸山城跡

第2図 遺跡の位置及び調査地周辺の地形と遺跡分布 (1/25,000)

第3章 調査の成果

1. トレンチ1

(1) 後円部斜面

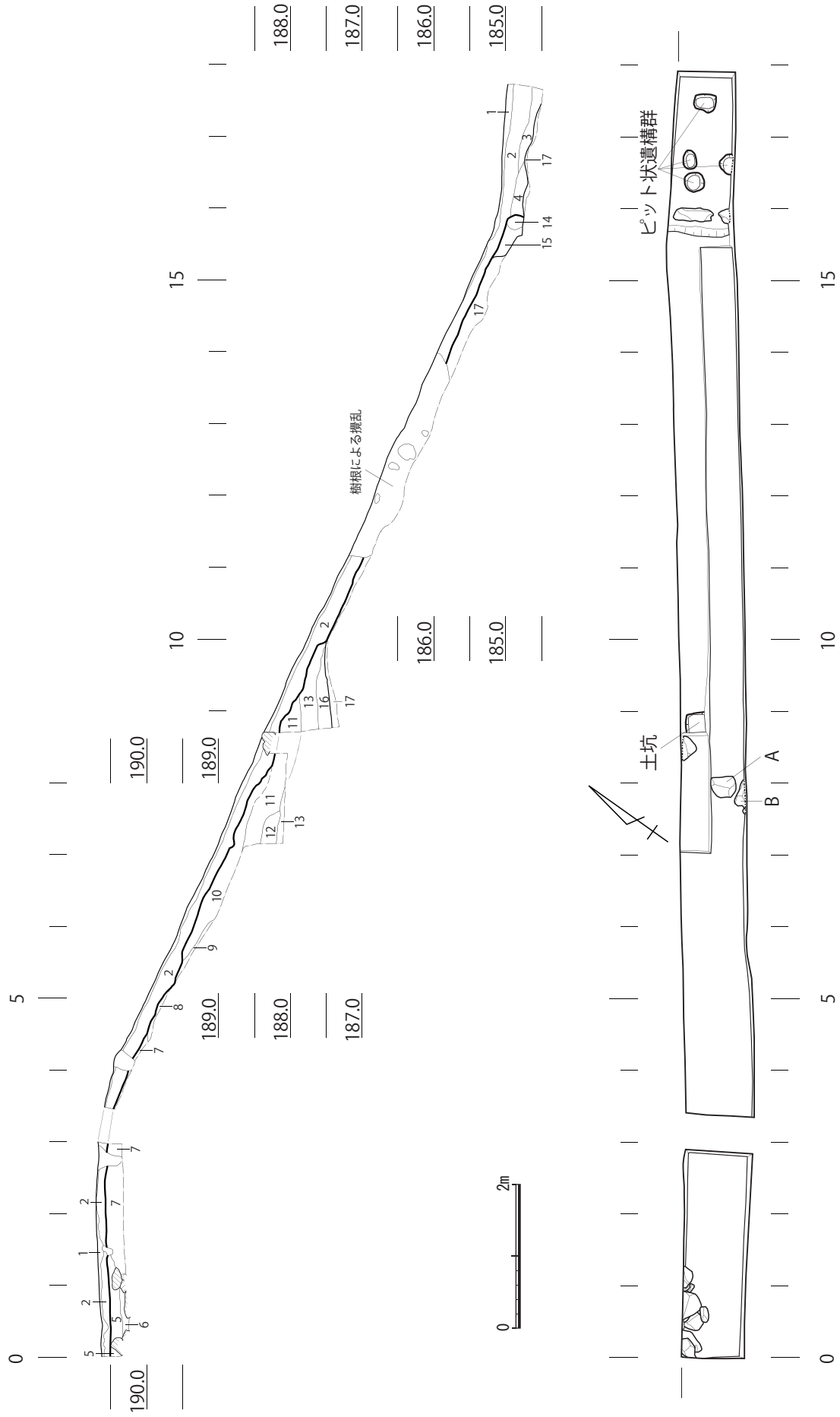
後円部北東斜面に長さ 14.5 m、幅 1 m のトレンチを設定し、墳丘面の検出とその構造ならびに葺石の有無の確認をめざして、表土より人力掘削をすすめた。その結果、各所において古墳築造に関わるとみられる石材を検出している。以下では墳丘裾から墳丘中位、低い箇所から高い箇所の順に調査所見を第3図を参照しながらまとめていきたい。なお、表土段階から排出土はすべて 6 mm メッシュのフルイがけを実施し、微細な遺物の回収をはかった。ただし、遺物出土量は少なく、出土はトレンチ北東端に集中していた。第3図の2および3層からの出土が大半であるが、正確な出土層位は不明である。

墳裾部 トレンチ北東端より墳頂方向へ 2 m、標高 185 m 付近において、長辺 55 cm、短辺 16 cm、高さ 20 cm の大型の石灰岩系白色亜角礫を検出した。礫の長軸は墳丘の傾斜と直交する。その南隣でもトレンチ壁面にかかるかたちで石灰岩系礫を確認した。また、トレンチ北東端より 1.5 m 付近で小ぶりの石灰岩系白色礫が7点が集積している状況で検出されている。これらの小さな白色礫を取り上げ掘削し続けると、地山(17層)を掘り込んだピット状遺構が3つ検出された。その平面形態は円形1基(深さ 17.5 cm)と楕円形1基(深さ 16.6 cm)であり、前者の直径は 24 cm 前後、後者は長径 24 cm、短径 16 cm を測る。もう1つのピット状遺構(深さ 19 cm)は調査範囲外に及んでいるため、正確な形状や法量は不明である。なお、同じく地山(17層)を掘り込んだ直径 24 cm 前後のピット状遺構(深さ 12.3 cm)が、トレンチ北東端 0.9 m 付近でも確認されている。その平面形態は隅丸方形を呈す。

大型の白色亜角礫は、墳丘の傾斜が水平から 23 度にかわる変換点で検出されている。なお、地中レーダ探査(本章第3節参照)により、同一標高の東西に墳裾をめぐるように石材が連続して存在する可能性が指摘されている。大型の白色亜角礫は墳丘側の地山(17層)を掘り込んだのちに、地山直上に置かれていた。掘り込まれた墳裾部には地山(17層)よりやや暗色の 15 層が充填されている。一方、小さな白色礫群は 4 層中より検出されており、地山直上にはなかった。サイズと検出位置および地山との関係から、大型の白色亜角礫のみが原位置をとどめた基底石と判断できる。これはトレンチ2墳裾部で検出されている石列の位置や検出状況、石材とサイズとも矛盾しない。なお、基底石内側の 15 層は、基底石の裏込め土と考えられよう。

【トレンチ1土層注記】

- 1 褐色粘質シルト(10YR4/4) 表土
- 2 黄褐色粘質シルト(10YR5/6) しまりやや有。流土。
- 3 黄褐色粘質シルト(10YR5/6) 赤褐色シルトブロック、炭化物含む。流土。
- 4 鈍黄褐色粘質シルト(10YR5/4) 赤褐色シルトブロック、炭化物含む。流土。
- 5 黄褐色シルト(10YR5/6) 地山ブロック 3 cm 程度を少量含む。盛土。
- 6 鈍黄褐色粘質(10YR5/4) 黄色・白色地山ブロック 1～2 cm 程度を含む。盛土。
- 7 黄褐色シルト(10YR5/8) 黄色・白色地山ブロック 5～10 cm 程度を多く含む。盛土。
- 8 明黄褐色シルト(10YR6/8) 黄色・白色地山ブロックを含む。盛土。
- 9 黄褐色シルト(10YR5/6) 黄色地山ブロックを含む。盛土。
- 10 黄褐色粘質シルト(10YR5/6) 黄色地山ブロックを含むが9層より少ない。炭化物含む。盛土。
- 11 黄褐色粘質シルト(10YR5/6) 黄色地山ブロックを多く含む。炭化物含む。盛土。
- 12 黄褐色シルト(10YR5/6) 黄色地山ブロック 3～5 cm 程度を多く含む。盛土。
- 13 鈍黄褐色シルト(10YR5/4) 鈍黄色地山ブロック 3 cm 程度を多く含む。炭化物含む。盛土。
- 14 黄褐色シルト(10YR5/8) 樹根を多く見られ、しまりが無い。石列裏込土。
- 15 黄褐色粘質シルト(10YR5/6) 礫含まない。石列裏込土。
- 16 鈍黄褐色粘質シルト(10YR4/3) 地山ブロック 1～3 cm 程度、赤色礫 1 cm 大を含む。炭化物含む。旧表土。
- 17 明黄褐色シルト(10YR6/8) 地山。



第3図 トレンチ1 横丘平面図・西壁断面図 (1/80)

基底石の外側で確認されたピット状遺構群は、2～4層掘削時には確認できず、地山精査時に検出された。ゆえに流土が堆積する前に掘り込まれた遺構と判断でき、古墳に伴う構築物の痕跡かもしれない。ただし、最も北東に位置する遺構は、ほか3つと離れていることに加え、掘り込みの深さも異なることから、遺構と解釈できるかも不明であり、墳丘側3つのピット状遺構とは異なる性格かもしれない。

地山（17層）は、トレンチに斜交する岩脈を有する特徴的な層であり、基底石の外側では表土下32cm、標高184.6m付近にて検出されている。しばらく平坦面が続くが、1.1m付近から再びゆるやかな傾斜となる。

基底石の内側では、トレンチ北東端から8m地点まで流土である2層直下で地山面が検出されているが、それより上位では盛土が施される。この地点の標高は187.5mである。

墳丘中位 トレンチ北東端より9.5m、標高188.2m前後の地点で長径32cm以下の石灰岩系白色礫が5点前後検出されている。そのうち第3図のA礫（長径32cm、短径26cm）とB礫（長径30cm程度）は、墳丘盛土である10層に半ば刺さる形で検出された。そのほかの白色礫は流土とみられる2層中より検出されており、原位置はとどめていないと判断できる。礫群が検出された標高188m付近には幅56cmにわたり、やや傾斜が平坦になる部分が認められる。この範囲が墳丘中位に設けられた平坦面の残存であり、白色礫は平坦面に巡る石列だった可能性も考えられよう。

さらに、墳丘土層確認のため設けたサブトレンチ内において旧表土である16層の下で土坑を検出した。地山である17層上面から掘り込まれたとみられ、検出範囲では方形を呈する。サブトレンチ外に続き遺物も出土しておらず性格は不明であるが、古墳築造以前に位置付けられる遺構である。

また、第3図の断面図から判断できるように、掘削時にはトレンチ北東端より6m地点も傾斜が緩やかとなる可能性を見出していた。しかし土層を観察した結果、この部分はトレンチ壁面にかかる樹木による影響で、墳丘上面となる地山がかく乱を受けていることが判明した。上述の傾斜変換点はかく乱部分と地山面の境界において確認されたものであるため、誤認識であった可能性が高いが、次年度以降の墳丘面調査にて、同様の地点から傾斜変換点が確認できるか注意を払う必要がある。なお、この地点にて礫は検出されていない。

（2）後円部墳頂部

後円部墳頂部に、当初のトレンチ（後円部斜面）との間に土砂流出防止のため50cmのベルトを設け、墳頂部における盛土の様相を明らかにするためにトレンチを南西側へ3m拡張し、表土より人力掘削を進めた。その結果、トレンチ南西端から1.3mの範囲で大型の石灰岩系白色礫群が検出された。以下ではこの礫群の詳細を第3図を参照し、土層をまじえながらまとめていく。なお、トレンチの後円部斜面と同様、表土段階から排出土はすべて6mmメッシュのフルイがけを実施し、微細な遺物の回収をはかったが、遺物は確認できなかった。

トレンチ南西端より1.3m、トレンチ北側3分の1の範囲で大型の石灰岩系白色礫が接した状態で7つ検出された。その多くがトレンチ外に続いているため、正確な大きさは不明だが、長径40cm近いものがみられる。礫群が検出された土（5・6層）は、色調や粘質、しまりから墳丘盛土であると判断できるため、この礫群は原位置を保っていると考えられる。礫群上部の墳丘盛土（5・6層）と礫群外の墳丘盛土（7層）は、含有される地山（黄色・白色）ブロックの大きさや量で区別できるが、その差はわずかであり、墳丘盛土を切る埋土は確認できていない。したがって、全容は不明であるものの、この礫群は墳丘盛土を構築する過程で設置されたものと解釈できよう。なお、地中レーダ探査では、本トレンチの北西側において推定深度約0.4m～1.0m付近に石材を用いた埋葬施設の存在が指摘されている（本章第3節参照）。今後の調査課題としたい。

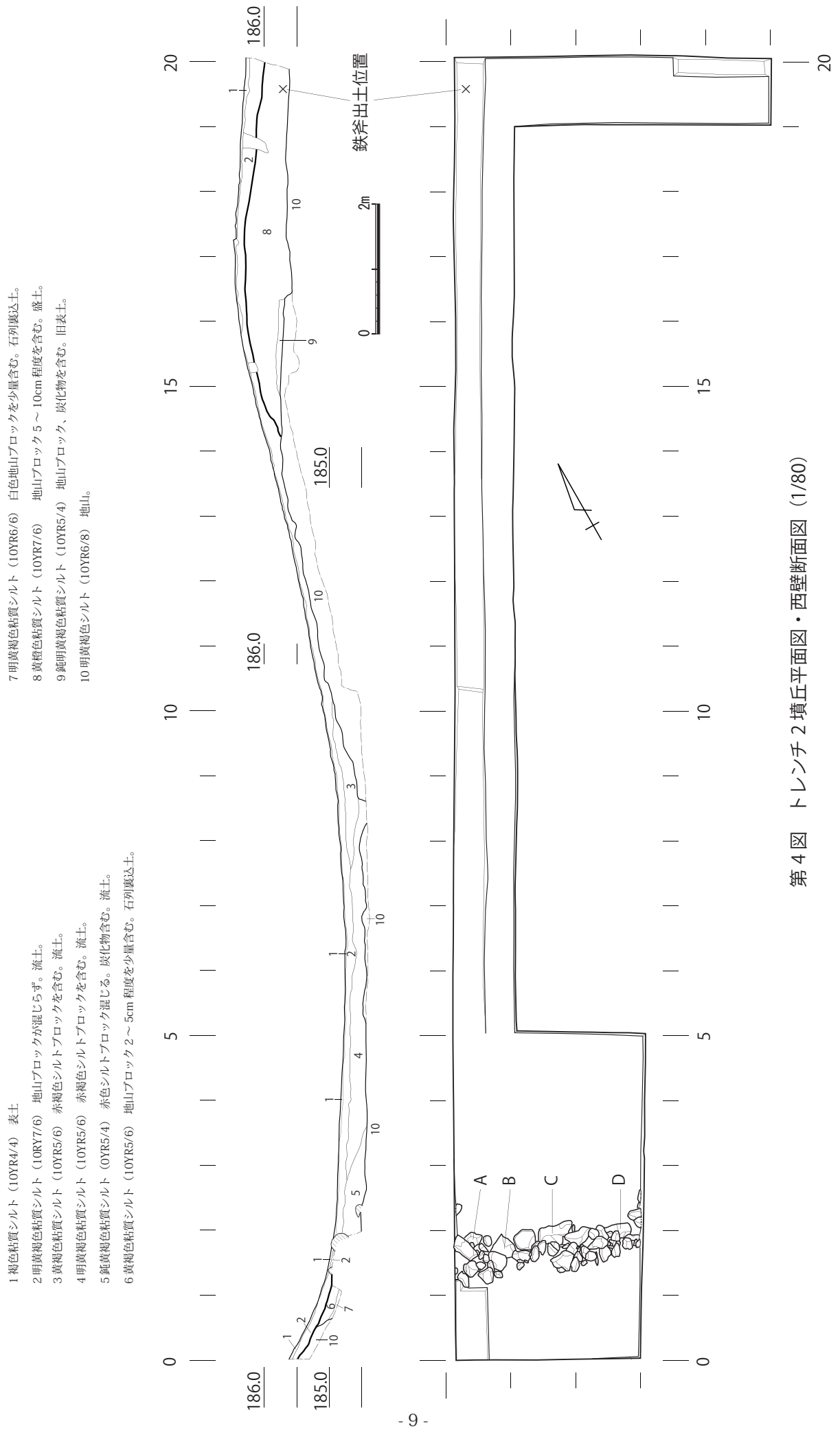
2. トレンチ2

後円部南西に全長約 20 m、幅 1 m のトレンチを設定し、墳丘裾部の検出と後円部北西部に広がる平坦面ならびに高まりの性格を明らかにするために、表土より人力掘削をすすめた。トレンチ 1 と同様、表土段階から排出土については 6 mm メッシュのフルイがけを実施し、微細な遺物の回収をはかった。回収した遺物は次の 4 区画、A 区：トレンチ南西端から 3.3m、B 区：3.3m～5.3m、C 区：5.3m～7.3m、D 区：7.3m～10.3 m に分けてふるった。調査の結果、墳裾部からは古墳築造に関わると考えられる石材を検出し、北西部からは盛土を検出した。以下、その詳細を述べる。

墳裾部 地表面から 0.4m、標高 184.5 m 付近で長径 20cm 前後の石灰岩系白色垂角礫が散乱した状態で検出された。そこで、トレンチ西側の東西 0.5m、南北 2 m を拡張し、礫群を追った。拡張範囲を掘り下げたところ、流土(第 4 図 5 層)中から小型の白色礫を 10 石以上検出した。いずれの白色礫も原位置を留めていなかったと判断できる。さらに掘削を進めると、表土下約 45cm で地山(10 層)が確認され、この地山(10 層)直上には大型の石灰岩系垂角礫が 2 石置かれていた。2 石のうちトレンチ西側に存在する礫(礫 A)は長辺がおよそ 40cm、高さ 10cm で、地山に対して水平に置かれていた。東側の礫(礫 B)は長辺がおよそ 35cm、短辺が 20cm、高さ 10cm で、長辺がトレンチの軸に対して傾いており、地山に対して水平に置かれていた。サイズや検出層位、向きから、礫 A・B とも基底石だと判断できる。また、この 2 石の上面には、大小様々な白色礫が不定方向に散乱して検出されており、流土に含まれると判断したものや面を揃えていないものは、掘削を進めるなかで取り上げ、図化した礫の多くは、原位置から大きく動いていないと判断したものである。なお、墳丘側の斜面の 6 層は、これらの石列との位置関係から裏込め土と考えられる。

基底石と考えられる 2 石と地山を検出した後、石列の東西方向の広がりを確認するために、トレンチ西端から南北方向に 5 m、東側を 2 m 拡張し、掘削を進めた。その結果、小型の白色礫群が東側に広がり、石列状を呈していることを確認した。こちらの石列は、調査期間の都合上、石列の南側にあたる墳丘側の土は掘り下げていないが、土色等から西壁で確認した裏込め土(6 層)であるとみられる。石列外側では、地山面の検出を目指し掘削を進めた。その結果、西側と同じように地山(10 層)の直上から大型の石灰岩系垂角礫を 2 石検出した。西側の礫(礫 C)は長辺およそ 50cm、短辺 30cm で、地山直上に墳丘の傾斜と同じような角度に傾斜した形で置かれていた。東側の礫(礫 D)も地山直上にて墳丘の傾斜と角度を合わせる形で検出されており、その法量は長辺およそ 40cm、短辺 25cm を測る。東側の 2 石もまた、地山直上に置かれていたことやそのサイズから基底石である可能性が高く、上位からの土砂流出の影響で若干傾いているものの、ほぼ原位置を保っていると考えられる。礫 C の上面には、上述した裏込め土の一部が含まれる状況で長辺 20cm 程度の礫が 2 石、礫 C と面を合わせて積まれている。この礫の上にも、同サイズの礫が 2 石、面を合わせて積まれており、こちらも裏込め土の一部が埋められていた。なお、これらの礫の上面でも礫が出土しているが、原位置を保っているか判別し難い。礫 D の上面でも同様に、長辺 20cm 程度の小型の礫が一部裏込め土に埋められていた。したがって、基底石の上位に 2 石以上の小型の礫が積まれていたと判断できる。その高さは 40cm 以上となる。

遺物の検出状況 石列を検出する際に弥生土器の細片(第 10 図 15～18)が出土している。多くは墳丘盛土を起源とするとみられる流土(第 4 図 5 層)中の検出であった。したがって、古墳築造に先駆けて弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構や遺物、遺物包含層が存在し、それらが墳丘盛土に用いられ、その後の墳丘崩落に伴い下方に堆積したと考えられる。さらに礫 C の外側からは 5 層中より 7 割程度が残存する土師器壺(第 10 図 1)が、本例から北東に約 2 m の地点からは、ほぼ完形の小型丸底土器(第 10 図 14)が逆位で検出されている。丸底土器の下端は地山とほぼ接しており、早い時



- 7 明黄褐色粘質シルト (10YR6/6) 白色地山ブロックを少量含む。石列裏込土。
- 8 黄褐色粘質シルト (10YR7/6) 地山ブロック 5～10cm 程度を含む。盛土。
- 9 鈍明黄褐色粘質シルト (10YR5/4) 地山ブロック、炭化物を含む。旧表土。
- 10 明黄褐色シルト (10YR6/8) 地山。

- 1 褐色粘質シルト (10YR4/4) 表土
- 2 明黄褐色粘質シルト (10YR7/6) 地山ブロックが混じらず。流土。
- 3 黄褐色粘質シルト (10YR5/6) 赤褐色シルトブロックを含む。流土。
- 4 明黄褐色粘質シルト (10YR5/6) 赤褐色シルトブロックを含む。流土。
- 5 鈍黄褐色粘質シルト (0YR5/4) 赤色シルトブロック混じる。炭化物含む。流土。
- 6 黄褐色粘質シルト (10YR5/6) 地山ブロック 2～5cm 程度を少量含む。石列裏込土。

第4図 トレンチ2 墳丘平面図・西壁断面図 (1/80)

期の転落と考えられる。

中央の平坦部 トレンチ2の西端より北におよそ5m地点から15m地点にかけて周溝の有無、および地山の検出を目的として掘削を行った。遺構は検出されなかったが、弥生土器の小片が出土している。

掘り下げたところ、地山はトレンチ2の西端からおよそ8m地点まで標高184.5m程度でほとんど変化することなく検出したが、8m以北では徐々に地山検出面の標高が上がり、最高地点で185.7mとなる。トレンチ中央の地山検出面が低くなっているのは、墳丘盛土を得るために掘削された可能性がある。ただし、墳裾から北方向において周溝と認定できるような明確な掘り込みは確認できなかった。

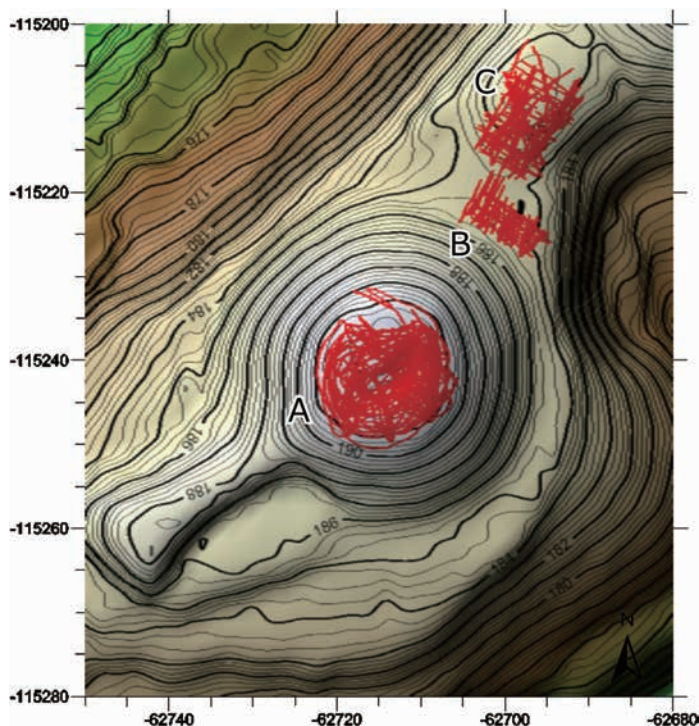
北東側における高まり トレンチ2北端付近に、高さ1.5m程度、一辺7m前後の方形の高まりが存在することが、第1図の等高線図からは読み取れる。そこで、本トレンチ北端から5mをこの高まりと重複させ、その性格を解明すべく幅50cmでサブトレンチを設け掘削を進めた。狭い範囲でトレンチ調査のため、高まりの性格を確定することはできなかったが、標高185.5m付近で地山(10層)を検出した。さらにトレンチ北端から3.65mから5.15mの間では、旧表土(9層)が約10cmの厚さで堆積する。旧表土北端部分では旧表土及び地山(9・10層)を掘り込んで8層が堆積するように見えるが、その北側でこれと対をなすような様相はみらなかった。2層と8層の境目付近からは紙で包まれた寛永通宝が6枚出土し、近世遺構の埋葬施設に関連する行為があったことをうかがわせた。さらに8層下部、地山から5cmの高さから完形の板状鉄斧(第10図19)が出土している。ただし、狭い調査範囲では鉄斧に関係するような墓壙の掘込などを見出すことはできなかった。今後の課題である。8層からは、弥生土器の小片も出土しているため8層をなんらかの盛土と解釈した場合、この高まりは弥生時代以降の遺構と考えられる。この高まりについては、古墳等の埋葬施設である可能性も考慮したうえで今後とも調査を進める必要がある。

3. 地中レーダ探査

(1) 探査の概要

岡山県真庭市所在の荒木山西塚古墳において、非破壊で遺構の様相を探るべく地中レーダ探査を実施した。探査は2022年11月27、28日及び12月12日の計3日間で実施した。探査に使用した機器は米国 US Radar 社製の Quantum Imager Triple Frequency GPR System である。同探査機に、高精度 GNSS 移動局を取り付け、近傍に設置した GNSS 固定局からの補正情報をもとに測定位置をリアルタイムで記録した。

第5図に探査測線を赤線で示す。探査箇所はA：後円部墳頂、B：後円部北東側裾部、およびC：西塚古墳の約20m北東に存在する性格不明の高まり、の3か所に分けられる。アンテナの走査においては、予め探査用グリッドを設定し、等間隔で平行に走らせるのではなく、任意の方向、長さ、間隔で自由に測線を設定することとした。これにより測量機器を用いた探査グリッドの設定や、測線の目安となるガイドロープの設置・移動の労力と時間を省き、短時間で探査を実施することが可能であった。



第5図 地中レーダ探査測線位置（赤線が測線を示す）

探査で得られた断面データ（GPR profile）に各種フィルター処理を行い、不要なノイズを消去した後、各探査区で得られたすべてのデータを総合し、地表からの等深度幅における反射強度の平面分布図（time-slice 図）を作成した。

(2) 探査結果

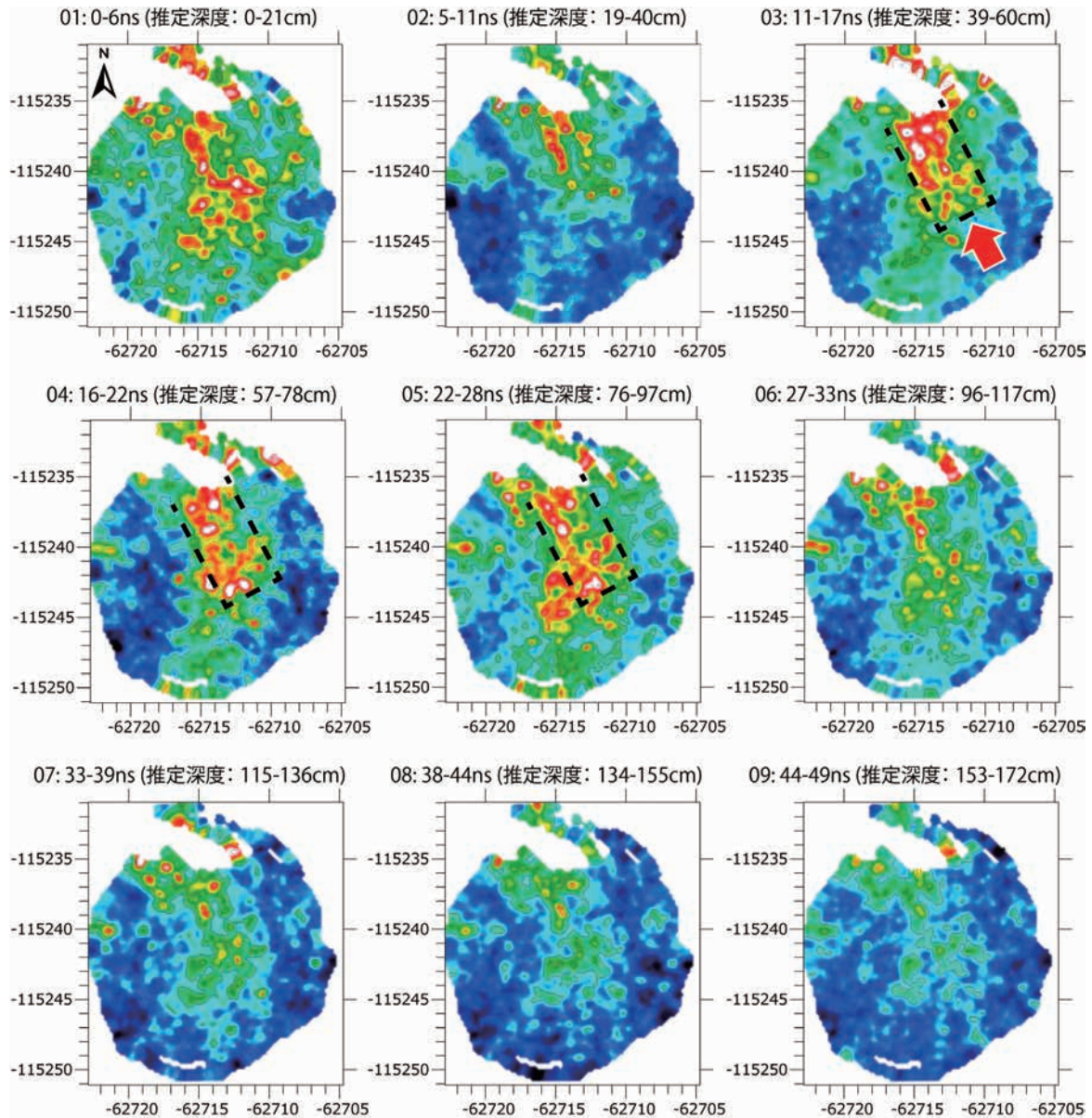
以下に各探査区における結果を述べる。

(A) 後円部墳頂

後円部墳頂で得られたデータより解析した time-slice 図を第6図に示す。深度 11-17ns（推定深度：39-60cm）から深度 22-28ns（推定深度：76-97cm）において、墳丘の中央部分に反射の強い領域（異常応答部分、図中赤矢印で示す）が南北に帯状に延びている。この異常の北側は、樹木の為探査できず、その南北長は不明であるが、東西幅約4m、南北長8m以上で、長軸を真北より約28度西に振る方形を呈しているように見える。この異常の位置は後円部の中心からやや北へ寄ってはいるが、埋葬施設を示しており、その反射強度から石材を用いたものである可能性が高いと考えられる。

(B) 後円部東側裾部

発掘調査によりトレンチ1及びトレンチ2において墳裾部に石材が発見された。これら石材が石列として墳丘をめぐるのかどうかを確認するために、両トレンチの間を埋める様に範囲を設定して探査を行った。time-slice 図を第7図に示す。深度 10-15ns（推定深度：39-59cm）および深度 15-20ns（推

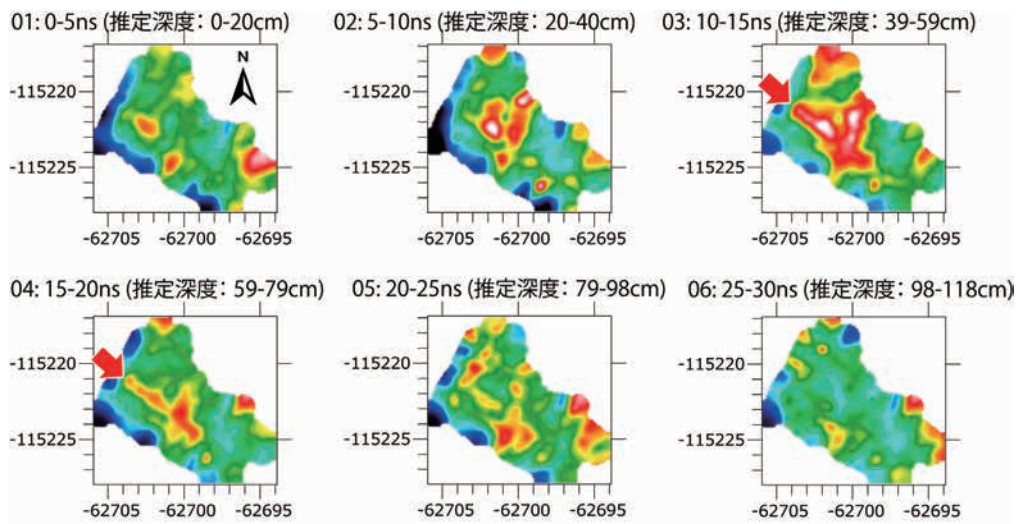


第6図 西塚古墳墳頂における time-slice 図
 (暖色が反射強度の強い領域、寒色が弱い領域を示す)

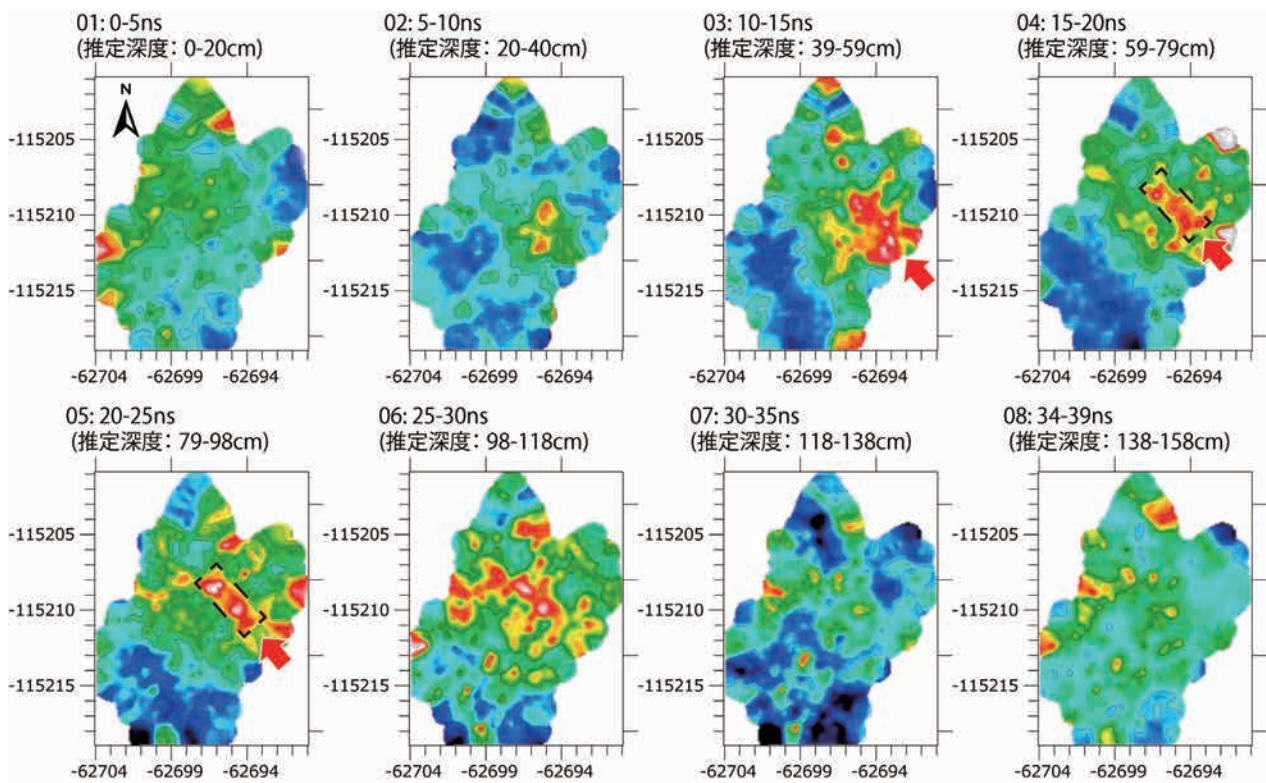
定深度：59-79cm) の time-slice 図において、南東の墳丘裾に沿うように帯状の異常応答が認められた (図中赤矢印で示す)。これは墳丘裾をめぐる石列を捉えたものと考えられる。石列と考えられる異常応答は、北西から南東へと延びる途中で途切れているが、これは石材が一部抜き取られているか、流出した箇所を示しているのかもしれない。

(C) 性格不明の高まり

荒木山西塚古墳より北東へ約 20m の地点、荒木山東塚との間に比高約 1.5m の高まりが存在している。これが自然地形であるのか、古墳築造に伴う人工的な造作によるものであるのか、もしくは前時代の墳丘墓等であるのか等、様々な可能性が考えられたが、解明の手掛かりはなく、その性格は全く不明であった。そのため何らかの情報を得るため探査を実施することとした。time-slice 図を第8図に示す。深度 10-15ns (推定深度 39-59cm) から深度 25-30ns (推定深度 98-118cm) にかけて



第7図 後円部東側裾における time-slice 図

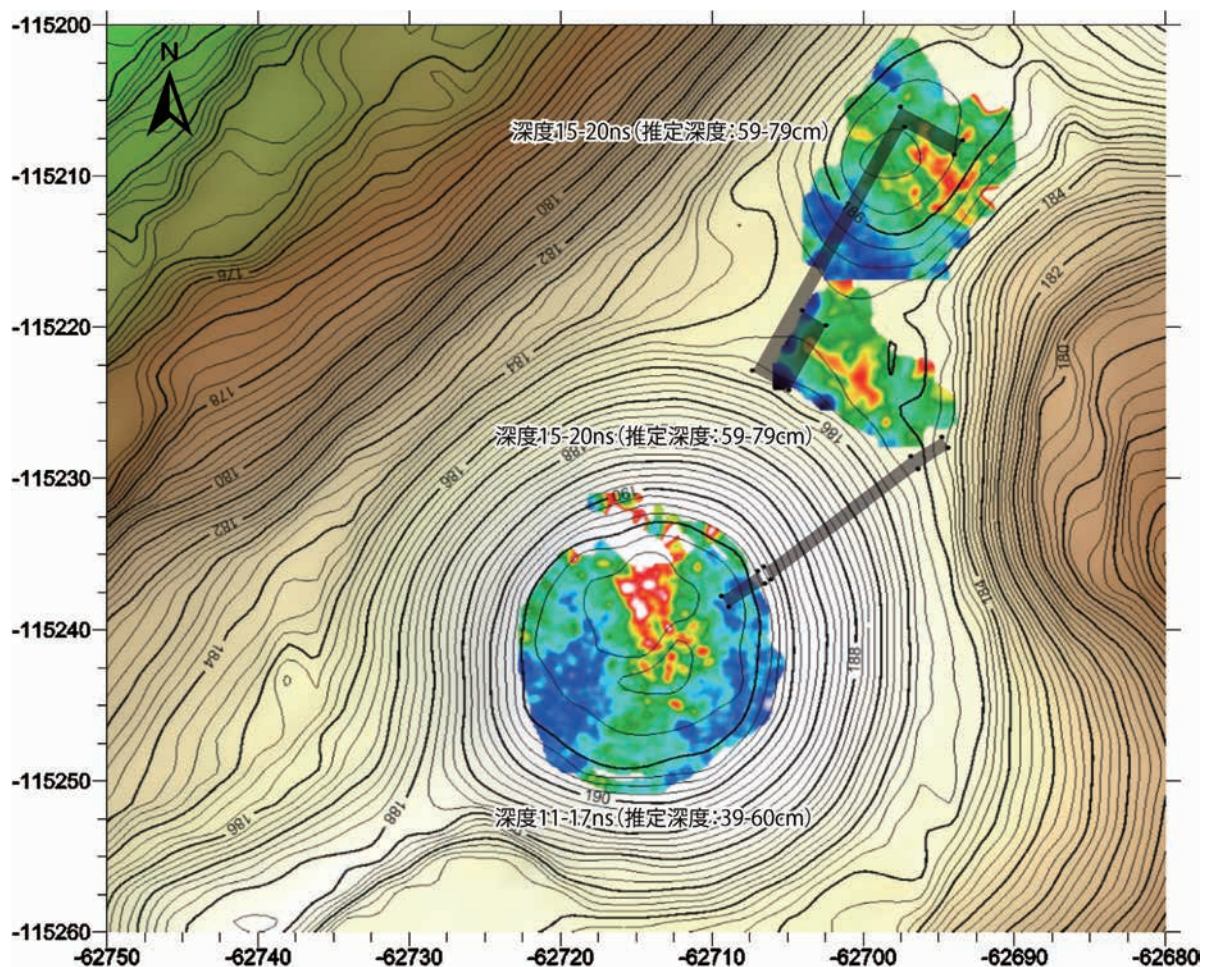


第8図 性格不明の高まりにおける time-slice 図

異常応答が認められた。特に深度 15-20ns (推定深度 59-79cm) 及び深度 20-25ns (推定深度: 79-98cm) にかけて、異常応答の平面形が帯状 (方形?) を示している。その大きさは幅約 2 m、長さ約 5 m である。これをもって何らかの人工物という判断はできないが、遺構である可能性も十分に考えられる。

(3) まとめ

荒木山西塚古墳において、非破壊で地下の遺構を探るべく地中レーダ探査を実施した。代表的な探査結果を第9図に示す。後円部墳頂においては、墳丘の中心やや北側に東西約 4 m、南北 8 m 以上の石材を伴う埋葬施設と考えられる異常が捉えられた。また墳丘北東裾では墳丘を取り巻くように帯状の異常が認められ、墳丘裾には石列がめぐると考えられる。西塚古墳の北東に存在する性格不明の高まりは、探査結果から遺構であるかどうかの判断は困難であるが、最高部から南東へと帯状の異常が確認でき、これは何らかの遺構の存在を示唆しているのかもしれない。



第9図 荒木山西塚古墳における代表的な探査結果 (灰色網掛け部分はトレンチを示す)

< 謝辞 >

西塚古墳墳頂部の探査については、真庭市立北房中学校3年生と共に探査を実施した。寒風の中、重い探査機を押してデータ収集していただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

4. 出土遺物

今回の調査では少量の遺物が出土した。内訳は弥生時代または古墳時代の土器が大半であるが、他に鉄斧1点、銅銭7点を確認している。トレンチ1・トレンチ2ともに遺物が見られるが、特に後円部墳裾外側付近に集中していた。遺物の大半は流土中に含まれるが、トレンチ2では北側の盛土中に含まれる土器片もわずかに存在する。また、排土のふるい掛けからも若干量の土器片を採集した。

整理作業は継続中であるが、現時点での成果として、19点を図化し報告する。8～10・12はトレンチ1、1～4・13・15はトレンチ2のA区、5～7・11・14・16・17は同B区からの出土である。5・11・18はふるい掛けによる採集である。

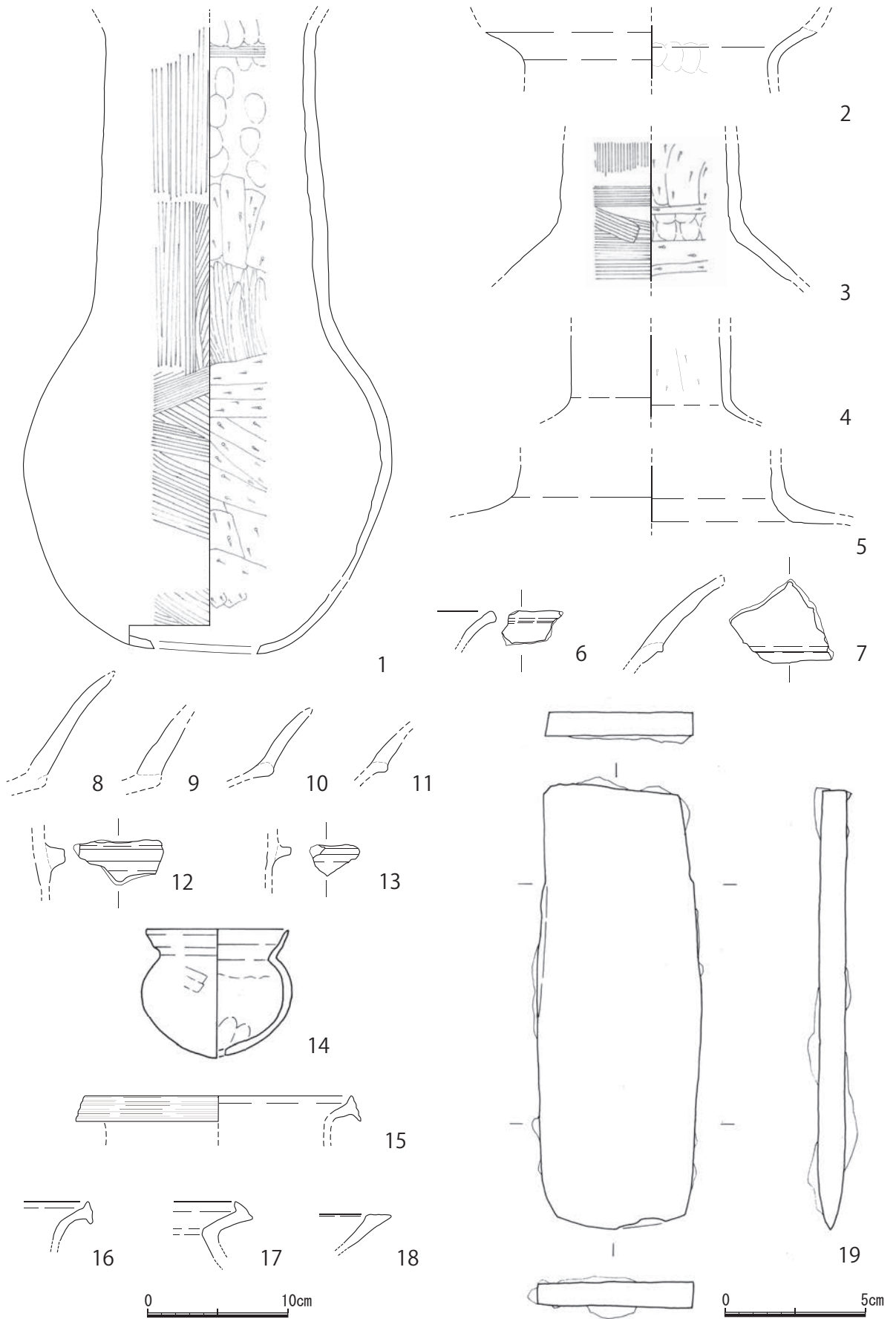
土師器 1～11は壺形土器である。1は頸部から底部まで約7割が残存していた。資料の上端がわずかに外反しており、口縁部もしくは受け部へ続くと考えられるが、同一個体とおぼしき口縁部や受け部の破片は確認できなかった。復元高44.9cm、頸部中央で径16.3cm、胴部径26.3cmを測る。長頸で胴部は左右非対称ながら球形に近い形状を呈すが、肩部の張り出しは明瞭ではなく、頸部との境は曖昧である。外面は全体にわたり赤彩が、底部には復元径7～8cm前後の焼成後穿孔が施されている。胴部下半には黒斑を有する。頸部外面にタテハケ、内面にユビオサエのほか、上端付近にヨコハケを施す。体部外面に斜め方向のハケ、内面にケズリを施す。また、頸部と胴部の接合部分の内面には、接合後の整形に伴うものと考えられる、特徴的な棒状の痕跡が連続している。この棒状痕跡は上側を縦方向のケズリ、下側を横方向のケズリによって切られている。2は二重口縁壺形土器の受け部と考えられる。上端は口縁部との接合面で剥落している。3～5は壺形土器の頸部から肩部と考えられ、外面に赤彩がなされる。3は1と外形が類似しており、外面にヨコハケ、内面にケズリを施す。接合部付近に指頭圧痕が認められ、その上下を横方向のケズリによって切られている。4は内面に縦方向のケズリを施す。5は1や3と異なり頸部から肩部にかけて明瞭に屈曲する。調整は観察困難である。6は口縁部端部で外面に赤彩が施され、口唇部は面をなす。7～11は二重口縁壺形土器の口縁部から受け部の破片と考えられ、7～9は外面、10は内面の一部に赤彩の痕跡を残す。7は10・11と異なり、受け部が突出する形態である。8・9は同一個体の可能性がある。

12・13は突帯を有する土器片である。小片で器種不明だが、壺形土器の肩部突帯の可能性が考えられる。12は復元径が大きくなるため、埴輪片の可能性も考えられるが、同様の遺物はほかに出土していない。14は小型丸底壺。底部が上側、口縁が下側を向いた状態で出土した。口縁部の半周を欠失する以外は完形で、復元口径10.2cm、胴部径10.7cm、高さ9.1cmを測る。底部には径0.9cmの焼成後穿孔がなされている。全体的に器壁の摩滅が著しいが、外面の一部に斜め方向のハケ目が観察でき、下部に黒斑を有する。内面に接合痕が認められ、色調は赤味がかっていることから赤彩されていた可能性が考えられる。出土資料の中で唯一全体の形が分かる資料であり、形態や胎土の特徴から古墳時代前期後葉のものとして位置づけられる。

なお、上記の赤彩はいずれもベンガラによるものと考えられる。

弥生土器 15・16は壺形土器。いずれも口縁部を上下に拡張し、退化した数条の凹線文の痕跡がみられる。17は甕形土器でL字状に外反した口縁端部を上方に拡張する。18は高環形土器。水平方向外方に拡張した口縁部の上面に15・16同様の凹線文の痕跡を残す。いずれも弥生時代中期末葉から後期前葉頃に位置づけられる。

金属器 19はトレンチ2北東隅付近で出土した両刃の板状鉄斧。長さ16.8cm、幅6.3cm、厚さ1.0cm、保存処理前の重さ597.5gを測る。形態から弥生時代または古墳時代に帰属する可能性も考えられる。また、図示しないが、同じ北東隅において明黄褐色粘質シルト（第4図2層）最下部から紙に包まれた状態で寛永通宝6点（図版6－5）が、より上位で識別不明の古銭1点が出土した。



第10図 出土遺物 (1/4、19のみ 1/2)

第4章 調査のまとめと課題

今回の荒木山西塚古墳第1次発掘調査では、後円部の墳丘の規模・構造及び遺物等について重要な知見を得ることができた。調査で明らかになった点をまとめると以下のとおりである。

墳丘規模・構造 トレンチ1・2において確認できた墳端位置から復元した後円部径は約40mと推定される。墳丘主軸上に設定したトレンチ1では、墳裾から墳頂部平坦面の盛土上面までの高さは約5.8mを測り、墳端から高さ約2.85mまでは地山を削り出し、それより上部は盛土により築造されていることが判明した。地山と盛土との境界部分では古墳築造時の旧表土層を確認し、その下位から築造以前の土坑も検出されている。次に、本古墳では外表施設は従来想定されていなかったが、今回の調査で石列を検出した。墳裾の石列は、トレンチ2では3段以上、トレンチ1では1段のみ石材を確認した。また、墳丘中位においても石灰岩の礫2点が列状に検出された。すぐ北側に約60cm幅の狭小な平坦面が認められ、段築に伴う平坦面を巡る石列の可能性が十分考えられる。よって、現状では後円部は2段以上の築成とみなすことができる。後円部斜面には石列石材と同じ石灰岩の礫が点々と地表面に露出しており、地中レーダ探査により地中に残る石列の様相を追究するとともに、さらに別の箇所でも調査を行うことにより、段築の状況を確認することが望まれる。

埋葬施設 墳頂部平坦面では、トレンチ隅において石灰岩の礫群が地表下の浅い部分で検出された。全容は判明していないが、墓壙等の堀込みは確認できておらず、盛土にあわせて構築された遺構と現状では考えられようか。地中レーダ探査では、この礫群から南東に約5m離れた位置において石材を用いた未知の埋葬施設の存在が推測されている。今回検出した礫群は、この埋葬施設に関連する石材あるいは別の埋葬施設の一部である可能性が想定される。

出土遺物 トレンチ2の墳裾付近を中心に古墳に伴うと考えられる土師器が出土したことも大きな成果である。特に、小型丸底壺(第10図14)は、形態や胎土といった特徴から、河合忍氏による編年(河合忍2018「山陽東部」『前期古墳編年を再考する』、中国四国前方後円墳研究会)の6・7期(古墳時代前期後葉、4世紀中葉～後葉)に位置づけられると考えられ、1点のみの資料に基づく点は留意しつつも、現時点で築造時期を決める手がかりとなる。長頸の壺形土器(第10図1)は県内では類例の見られない形態であり、今後その系統を追っていく必要がある。また、弥生時代中期・後期の土器片の発見は、古墳築造以前の遺構の検出とあわせ、この地が古墳築造以前にも土地利用されていたことを明らかにした。

北東側における高まり 西塚古墳北東側の高まりについては、今回の調査で盛土による人工的なものであることが判明した。盛土と認識した土層から鉄斧が出土したり、流土最下部において紙に包まれた状態で六文銭が出土していることから、古墳時代以前の墳墓や近世の埋葬施設あるいは隣接する中世の荒木山東塚城跡に関連する遺構など様々な可能性が考えられるが、今回の調査でその性格は結論づけられなかった。調査範囲を追加したうえで改めて検討する必要がある。

令和5年度に予定する第2次調査の主な課題としては、古墳の規模の確定、残存状況を確認するための前方部の発掘がある。次に、後円部の墳丘構造についても、今回の調査で判明した石列の構築や段築の状況、盛土と地山との境界等を他の箇所でも確認し、さらに検討していく必要がある。最後に、西塚古墳北東部の人工的な高まりについて、その性格を解明することが挙げられる。

1 後円部遠景
(北東から)



2 トレンチ1全景
(北東から)



図版2 トレンチ1(2)



1 墳裾部
(東から)



2 墳丘中位
石列
(東から)



3 墳丘中位
盛土端
(南東から)

1 墳丘中位
墳丘下層の土坑
(北東から)



2 墳頂部
(東から)



3 墳頂部
礫群検出状況
(南東から)



図版4 トレンチ2(1)



1 墳裾部
(北東から)



2 北東側全景
(南から)



3 北東側
土層断面
(北東から)

1 北拡張区全景
(南東から)



2 填裾部
礫検出状況
(北東から)



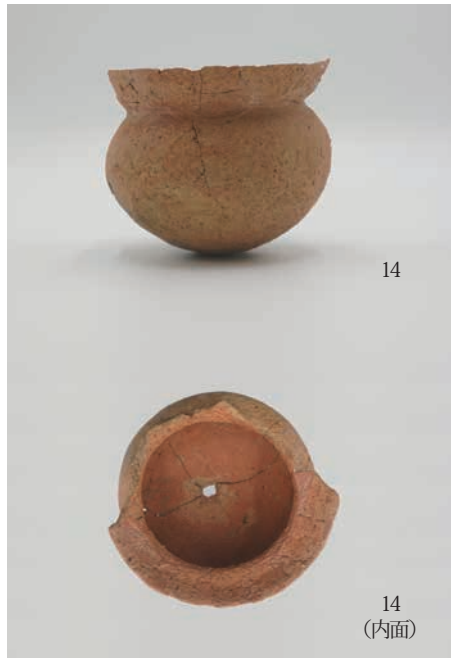
3 壺形土器
出土状況
(北西から)



図版6 出土遺物



1



14

14
(内面)

1 (左) 壺形土器

2 (右) 小型丸底壺



3 土師器



15

17

18



19

(寛永通宝)

4 (左) 弥生土器

5 (右) 金属器

報告書抄録

ふりがな	あらかやま							
書名	荒木山							
副書名	真庭市史跡 荒木山西塚古墳第1次発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名	真庭市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	10							
編著者名	新谷俊典(編)・畦田正博・平井典子・寺前直人・鈴木崇司・津村宏臣・西村航希・岸田 徹・行田裕美・白石 純							
編集機関	真庭市教育委員会							
所在地	岡山県真庭市久世 2927 番地 2 TEL 0867-42-1094							
発行年月日	2023年11月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あらかやまにしづかこふん 荒木山西塚古墳	おかやまけん 岡山県 まにわし 真庭市 かみみづた 上水田 2146 外	332143	332140017	35度 57分 33秒	133度 38分 47秒	20221126 ～ 20230312	52㎡	遺跡の範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
荒木山西塚古墳	古墳	古墳時代	石列 ピット		土師器			

荒木山 真庭市史跡 荒木山西塚古墳第 1 次発掘調査概報

令和 5 年（2023 年）11 月 25 日発行

発行 真庭市教育委員会生涯学習課
岡山県真庭市久世 2927 番地 2
TEL 0867-42-1094

印刷 富岡印刷株式会社
岡山県真庭市勝山 264 番地

